豊橋市美術博物館友の会だより

2017年 Vol.97

FU風伯HAKU

展覧会紹介

市制施行110周年記念 「豊橋・ヴォルフスブルグ交流展」
FACE THE WORLD IN TOYOHASHI　HEINRICH HEIDERSBERGER

開催中～3月26日(日)　1階第3展示室

豊橋市とパートナーシティ提携を行うドイツ・ヴォルフスブルグ市との交流事業として、両市美術館およびハイデルスベルガー研究所との共同企画による展覧会を開催します。昨年6月から10月にかけて、ヴォルフスブルグ市立美術館において豊橋市の所蔵する東松照明の写真作品と浮世絵を紹介しました。このたびは、豊橋市美術博物館において、ハインリヒ・ハイデルスベルガー（1906-2006）の写真作品を紹介します。

ハイデルスベルガーは、ドイツのインゴルシュタットに生まれ、パリで絵画を学んだ後、写真に転向しました。1961年より亡くなるまで暮らしたヴォルフスブルグの風景やそこに暮らす人々を魅力的に写し取り、それらの作品は2002年にヴォルフスブルグ城内に設立されたハイデルスベルガー研究所で調査研究されています。ヨーロッパを中心に多くの展覧会が開催されていますが、日本国内でハイデルスベルガーの個展が開催されるのは今回が初めてとなります。展示作品は76点です。

《ポルシェ通り(北向き)》1962年

（学芸員　細田樹里）

●**ギャラリートーク**　3月19日(日)　午後2時～

収蔵品展 「没後10年 平川敏夫展」

3月7日(火)～4月2日(日)　2階展示室

豊川市小坂井町に生まれた平川敏夫は、中村正義らとの交流の中で日本画家を志し、独学で研鑽を重ね、1950年より創造美術展に出品をはじめます（翌年〈新制作協会〉日本画部、74年〈創画会〉と改称）。当初は素朴な表現で海浜や工場風景を描きましたが、なぎ倒されても再生し繁茂する植物のエネルギーに魅せられ、1960年代より樹林に燃え立つような生命力を託した独自の画風を確立しました。新制作展では三度にわたり新作家賞を受賞して会員に推挙されます。やがて1970年代より水墨画に比重を移し、染色を思わせる白抜きの画法を用いて独創的な水墨画を生みだしました。

以後2006年に死去するまで水墨への探究は続けられ、深山の樹林から波濤が打ち寄せる岩礁まで、幅広い主題を描き、1992年に豊橋市美術博物館で回顧展を開催したほか、岐阜県美術館（97年）、秋野不矩美術館（2004年）、豊川市桜ヶ丘ミュージアム（同年）などで個展が開催されています。

《池畔》1975年頃

没年の前後には作家の遺志により、40点近い作品が当館に寄贈され、それまでの収蔵作品とあわせて日本画54点と素描・下図21点という充実したコレクションが形成されました。このたびの収蔵品展では没後10年を機に平川敏夫の画業をあらためてご紹介します。

（学芸員　丸地加奈子）

●**スライドレクチャー**／3月12日(日)午後2時30分～
●**ボランティア・ガイド**／期間中毎日(3月12日を除く)
午後1時30分～／2時30分～

特別寄稿

豊橋市美術博物館での11年を振り返って

豊橋市美術博物館アドバイザー　金原宏行

館長講座にて

豊橋公園内という立地に恵まれた美術博物館に新しい命を吹き込んで、市民に広く愛される存在であるようにしたい。美術博物館を新しきものと伝統的なものが一か所に集うトポスとしたい。そう願いながら11年が経ちました。

新鮮な企画によってこの空間を市民の身近な存在とし、美術・歴史のファンの輪を広げる一方、子供たちにとっても楽しく遊べる場所としたい。企画も３年先を見据え、しっかりと筋の通ったものとし、街の文化力を高め、美術博物館を心の癒しの場としたい。そんな思いを美博の友の会の皆様はいつも応援してくださいました。

豊橋には中村正義、星野眞吾、大森運夫はじめ、美術史上に逸することの出来ない日本画家が輩出し、これまでも東三河アートの蓄積がありました。これを生かすべく企画を温め、星野眞吾賞展も継続する。こうした先人の作品を広く全国に知らしめる展覧会と並んで一方、フィギュアや模型などいわゆるサブカルチャーと言われるものも採り入れ、時代に相応しい運営をする。そんな思いを「岡本太郎と中村正義〈東京展〉」で結集でき、両館のレガシー（作品資産）を生かしながらの川崎市岡本太郎美術館との交流は、互いに成果をあげたといえましょう。豊橋、飯田、浜松の３県にまたがる美術交流展もそうでしたが、こうしたものはすぐに効果が出るものではありません。本年はドイツの友好都市ヴォルフスブルグとの写真展が開催され、新しい歩みが始まろうとしています。

「岡本太郎と中村正義〈東京展〉」開場式

今や各市がお互いに芸術の発信力を競いあっています。そういう意味で「ワイエス展」や「ＮＩＨＯＮ画－新たなる地平を求めて－」などもこの館がやるべくして開催した展覧会です。

独自の企画を立てて全国に発信する展覧会はシティ・プロモーションとしても意義があります。いろいろな面で、力強く支えてくれた美博友の会の皆様には感謝の念で一杯です。

豊橋市美術博物館と友の会が市民の健やかな感性を養う場としてこれからもますます発展するよう願っております。

金原宏行先生は本年３月をもって豊橋市美術博物館での職をご退任されます。長年にわたり美術博物館をご牽引されるとともに、友の会運営においてもご尽力いただきました。これからは（財団法人）名都美術館理事として運営に参画されるとのことです。これまでのご厚情とご助力に感謝申し上げるとともに、今後ますますのご活躍を祈念申し上げます。　（編集部記）

特別寄稿

追悼・大森運夫 「皓（しろ）き落日」

日本画家　山本直彰

大森運夫《皓き修羅》小下図　1984年　豊橋市美術博物館蔵

2016年10月2日通夜の斎場へ向かう道だった。高層ビルの谷間に落ちる秋の陽の塊りに、落日の皓い塊りに、僕は眩しくて眼を開けていられなかった。

船橋のお宅を頻繁に訪ねては応接間のソファーでお話を伺った。夏も冬も窓からの陽は傾いて僕らを照らしていた。３才で父を亡くされた先生の母子家庭と母子像のこと、ご母堂の豪気、戦時中のご自身の結婚、上京してからの貧困、神奈川県展大賞の賞金での欧州取材の帰りの空港での吐血、中村正義と東京展、そして最後はかならず信念のあり方についてだった。

ある時は現実生活の愚痴を聞いてくださったこともある。こちらは泣きそうなほど真面目に話しているのに、先生は笑いながら言われた。「絵描きになるってことは、甘くないということだよ」嬉しそうだった。全く売れなかった君もそこまで来たかとも受取れた。とにかく話題はその一言で終了だ。そんな時、居心地の悪い僕は壁に掛けられた額絵を見る。描き手が世界の全貌をどんなに鷲掴みで捕えようと、風景は孤独だけが残る。あの欧州旅行でのベルン(スイス)の風景ドローイングだ。僕はとても気に入っていた。

絵描きとその教え子はどこか不思議な関係にあるのだと思う。あらゆる偶然を運命と呼ぶべきか、そこには他者の入り込めない空白のエロスがある。

1987年の１月25日、当時70歳の先生は僕にこう言った。

「絵描きの休む時は死ぬ時だ。死ねば充分休めるんだ」

山本直彰《皓き落日》　2017年

山本直彰（やまもと なおあき）

1950年、神奈川県横浜市に生まれる。愛知県立芸術大学日本画科在学中、非常勤講師として来ていた大森運夫に指導を受ける。以後、大森の人間性や画家としての姿勢に共鳴し、新制作協会日本画部（現：創画会）を発表の場とするなど、生涯を通じて交流を深めた。廃棄されたドアを支持体に用いた「DOOR」シリーズをはじめ、「イカロス」「ピエタ」「帰還」などの抽象表現で知られる。2007年に創画会を退会し、現在無所属。

本年度企画展「NIHON画～新たな地平を求めて」に《帰還XXI》を出品（前号『風伯』展覧会紹介頁に作品掲載）。なお、《帰還XXI》は「新収蔵品展」（4/15-6/4）でも展示予定。

大森運夫先生（豊川市出身・創画会会員）は昨年9月29日に99歳で逝去されました。先生の長年にわたるご功績と画業を偲び、謹んで哀悼の意を表します。なお、山本先生の《皓き落日》は本稿執筆にあたり、新たに手がけられた大森先生へのオマージュ作品です。　（編集部記）

特別寄稿

「アルメニアン・ソングズ」コンサートを終えて

パーカッショニスト　加藤訓子

「アルメニアン・ソングズ」へご来場いただいた皆様、そしてご支援いただいた友の会の皆様へ、心よりお礼を申し上げます。今回私にとって初めてのプラット主ホールでの演奏会でもあり、音作りを始め、冒険でもありましたが、皆様の多大なご協力をいただき、当日沢山のご来場者となりましたことを重ねてお礼を申し上げます。会場へ足を運んでいただいた方々には、純粋に音楽や演奏、異国の香りなど、思い思いにお楽しみいただいていれば幸いです。

今回は私だけでなく、海外からのゲスト、モブセス・ポゴシアン（ヴァイオリン）、トニー・アーノルド（ソプラノ）の二人と演奏できたこと、私の海外活動の中から彼らを日本へ招き、そして豊橋の皆様にご紹介できたことは、何よりの喜びでもありました。必ずしも知っている曲ばかりではなかったと思いますが、初めて触れるアルメニアの音楽やアルメニアという国、日本、アメリカ、そして私たちが今ここにある現代という時代まで結びつける役目として、何かが皆様の心に響いていることを願います。

モブセスとトニーにとっても、未知なる日本という国、初めて触れる文化一つ一つに驚きと喜びでいっぱいだったようです。ことに豊橋の公演は彼らの希望もあり、こうして実現できたこと、翌日も豊橋に２日ほど滞在し、豊橋市美術博物館を訪れ、丁度普門寺旧境内から発掘されたという貴重な三河の仏教文化に触れることができました。その後三の丸会館にてお茶をいただき、続いて豊川稲荷を参り、「のぼりや」さんでうなぎをいただき、これらの経験をすべて心から味わい、喜んで帰って行きました。豊橋の皆様が彼らを温かく迎えてくださったことが何より彼らの心に刻まれ、素晴らしい日本滞在となったようです。代わってお礼を申し上げます。

友の会を始め豊橋文化に携わる皆様の温かいご理解とご支援には、毎度頭がさがる思いです。文化に携わる身としての知識も至らずですが、音楽を通じての皆様との交流、海を隔てての文化の交流の一端となる役目を少しでも果たせるよう、皆様のご指導をいただきながら頑張って行きたいと思いますので、どうぞよろしくお願いいたします。

◆会員の声

パーカッションって何だろう？最初に「加藤訓子パーカッション演奏会・アルメニアン・ソングズ」のお誘いをいただいた時、正確なイメージが湧かなかった。昔、パーカッションということでマリンバの演奏を聞いたことがあるので、マリンバかな？くらいであった。しかし、訓子さんは「豊橋市美術博物館友の会」とご縁があり、高校の後輩でもある。まずは行ってみることにした。

演奏者は3人、当の訓子さん、ヴァイオリニスト、ソプラノ歌手。さてこの三人で何が始まるのだろう。舞台にはマリンバ、ヴィブラホン等が並ぶ。最初はヴァイオリンのソロ、バッハのシャコンヌ、これは耳慣れているし、演奏も素晴らしかった。次々と演目が進んで行くが、以後は初めての曲ばかりで、演目案内は字が細かく、老人の眼には読みにくかった。しかしパーカッションの音色は素晴らしく、小柄な訓子さんの敏捷な演奏は蝶々が舞っているように優雅であった。

千木良万里（520）

秋の研修旅行記

昨年11月22日、秋の研修旅行としてアサヒビール「大山崎山荘美術館」（京都府大山崎町）へ日帰りで行ってきました。美術博物館からは毛利伊知郎館長が同行され、「開館20周年記念　うつくしいくらし、あたらしい響き－クロード・モネ」を見学しました。参加者の声をお届けします。

紅葉の京都大山崎山荘美術館を訪ねて

加藤浩子（1037）

以前にも一度、この友の会で訪れたことがあるので、思いは一入（ひとしお）でした。

天候にも恵まれ、車中で毛利伊知郎館長のお話を聞きながら、宇治東より萬福寺到着。

門前の「白雲庵」で普茶料理の昼食も又嬉しいひとときでした。食礼様式を正確に踏襲した長方形朱色の飯台に４人が会して、蘭茶から始まり、二汁六菜の素朴さの中にも豪華な料理を和気藹々と楽しくいただきました。

実業家・加賀正太郎の別荘だった英国風の山荘。加賀が若き日に留学したとき、英国のウインザー城から眺めたテムズ川の流れに感銘を受け、木津川、宇治川、桂川の三つの河が合流する此の地に建てたといわれています。アサヒビールが京都府と大山崎町と保存協力して1996年に「アサヒビール大山崎山荘美術館」として甦りました。開館20周年を記念し、所蔵品の柱である印象派の巨匠であるクロード・モネに焦点を当て、所蔵作品8点と国内美術館等から厳選された珠玉の作品を合わせた20点を、ゆっくりと眺めながら、モネの生きた時代を振り返ることが出来ました。

山荘の池には睡蓮が植えられ、クロード・モネの睡蓮との出会いは、モネが追い求めた美に思い

参加者48名・萬福寺にて

を馳せるひとときともなりました。

山本為三郎（初代社長）コレクションには、河井寛次郎、濱田庄司、バーナード・リーチ、芹澤銈介、黒田辰秋等の工芸の名品も素晴らしく、隅々まで行き届いた職人の技と、趣味人の遊び心など、見どころは尽きません。

約5500坪の広大な庭を散策するには、時間が足りませんでした。しかし、ティータイムのテラスからの眺めは、木津川、宇治川、桂川の三川や、石清水八幡宮の男山一望など、素晴らしいものでした。思い出深い研修旅行に感謝しつつ。

菫持つカミーユ夫人へ黙礼す　浩子

旅行アンケートから

- 安藤忠雄（設計）の階段を降りて地下に入っていく雰囲気（大山崎山荘美術館の地中館）は直島の地中海美術館を思い出し、円形の壁はオランジュリー美術館のモネの壁の水蓮を思い浮かべることができ、楽しいときを過ごせました。昼食の普茶料理もていねいな手の入った味付けで素の味がよくわかり満足でした。
- 庭の紅葉+建物+モネ+アプローチすべてが一体化してすばらしかったです。
- 展示作品もさることながら館内が迷路のようになっていて、頭を使わないと回れないのが面白かった。自分達ではなかなか回れない、あるいは知らない所へ連れて行って頂けることに大変感謝しています。
- （車中での）館長さんの解説など、鑑賞の参考になりました。
- 友の会のメンバーとはっきりわかるプレートのようなものがあるといいなと思いました。

※（　）内編集部補足

会員証更新の時期になりました

【会員証】上田薫《スプーンの苺》

平成29年度は下記の展覧会鑑賞のほか、友の会事業として、ミュージアムコンサート、土曜サロン(美術講座)、研修旅行など、皆様に楽しんでいただける企画を予定していますので、ぜひご参加ください。
※以下①～③いずれかの方法で会費をお支払いください。

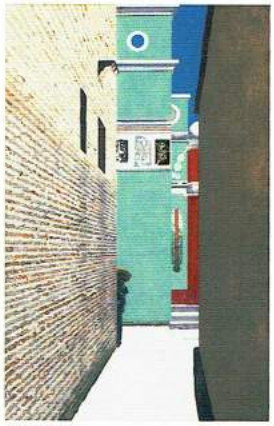
①**美術博物館** …… 窓口にて会費をお支払いください
②**郵便局** …… 専用の払込票をご利用ください（別途送付済）
③**銀　行** …… 下記口座へお振込みください（手数料有料）
三菱東京ＵＦＪ銀行　豊橋支店
口座番号：普通４８０６７６８　　口座名：豊橋市美術博物館友の会

平成29年度 展覧会スケジュール

美術博物館（※□は有料企画展）

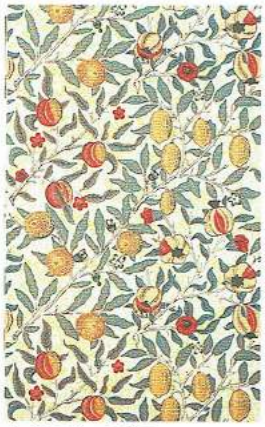
「新」収蔵品展	4.15(土)～6.4(日)
第39回 豊橋美術展	5.2(火)～5.14(日)
第7回トリエンナーレ豊橋　星野眞吾賞展 ～明日の日本画を求めて～	8.11(祝・金)～9.10(日)
「漫画界のレジェンド　松本零士展」	9.2(土)～10.22(日)
「ニッポンの写実　そっくりの魔力」	9.30(土)～11.12(日)
豊橋の寺子屋展	11.3(土)～12.3(日)
第67回 豊橋市民展	12.12(火)～12.24(日)
収蔵品展「生誕100年　森緑翠と白士会」	1.30(火)～3.4(日)
「ウィリアム・モリス展」	2.17(土)～3.25(日)

松本零士《銀河鉄道999》
©松本零士



森緑翠《佛山小径》1968年

安藤緑山《竹の子、豌豆、独活》牙彫
大正時代　清水三年坂美術館蔵
「そっくりの魔力」展



ウイリアム・モリス
《石榴あるいは果実》1866年頃
photo©Brain Trast Inc.

二川宿本陣資料館

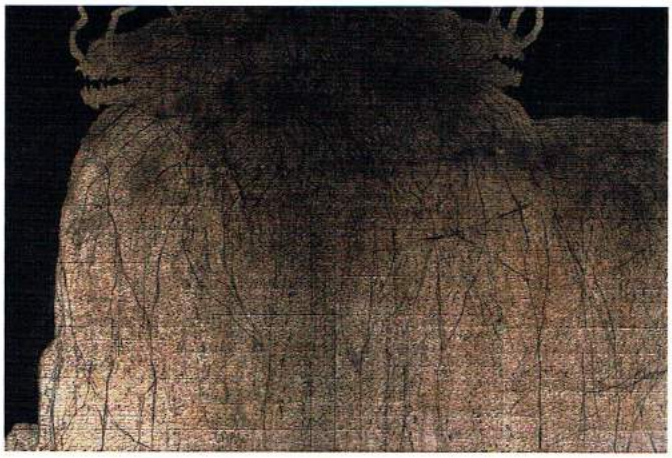
浮世絵ねこの世界展	7.15(土)～8.27(日)
岡山藩主池田家と吉田・二川展	10.7(土)～11.19(日)
田原市博物館所蔵 浮世絵名品展	12.2(土)～1.14(日)

収蔵品紹介

獄龍

岡村桂三郎●OKAMURA Keizaburo

2011年　板、木炭・着彩　295×440cm（撮影＝末正真礼生／画像提供＝コバヤシ画廊）



昨年、映画「シン・ゴジラ」が大ヒットを記録しました。初代ゴジラの迫力を記憶されている方も多いと思いますが、もはやゴジラは世代や国境を越えて受け継がれる現代の荒ぶる神獣といえるでしょう。人間の常識をはるかに凌ぐ巨大な怪獣が街を睥睨する様は恐怖そのものであるとともに、我々の心の奥底にある底知れないもの、カタルシスをもたらすものへの畏怖の念を呼び覚ますように感じられます。

日本画について思索を重ねていくなかで新たな造形性を獲得した岡村桂三郎は、そうした潜在する存在への意識を覚醒し、具現化してきた作家といえるでしょう。活動初期より主要なモチーフは動物でしたが、やがて「象」と「山」を融合させたアニミズム的主題へと展開し、東洋の伝説で語られる架空の生き物なども取り上げるようになります。

その独特の造形は、バーナーで杉板を焼き、白土や黄土を重ね、木炭で形をとり、その線をスクレーパーで削って線刻し、うろこ状の画肌を刻むという手順によるものです。これらの造形行為によって、従来の日本画には無い物質感と重厚な存在感が生まれ、岡村が言うところの「物体と立体の中間的な存在」「物体的な絵」が形成されました。

このたび収蔵した《獄龍》は、龍であると同時に岩山のようにも見え、岡村の原点である山塊を巨大な生物にみたてて描く行為にも通じます。イメージの源泉は台湾の故宮博物院にある范寛作《谿山行旅図》です。范寛描く図ではいくつもの盛り上がった塊が山頂部に密集していますが、岡村はこれを龍の頭としてとらえています（一見すると双頭の龍ですが、実物をよくみると中央にも複数の眼や髭が認められるでしょう）。二曲仕立ての屏風形状が効果的に用いられているため、絵の前に立つと巨大な龍（山）に包まれているような感覚に陥ります。

かつて「もう僕は自分の事を、日本画家と呼ばない」（1998年／『LR』8号）と宣言した岡村は、出自とする日本画からの逸脱をはかり、原初的な絵画の在り方を探究してきた作家です。とはいえ、現代日本画に欠くことのできない存在として、これまでも数多くの現代日本画展で取上げられてきました。

昨年の「NIHON画－新たな地平を求めて－」でも本作品を紹介しましたが、新収蔵品展（4/15–6/4）にて再び展示いたしますので、ぜひ圧倒的な存在に見降ろされる感覚をご体感ください。

（美術博物館主任学芸員　丸地加奈子）

編集後記

今年はこの友の会も、30周年を迎える。この「風伯」の1号は1988年3月発行であるから、かれこれ30年だ。ちなみにこの「風伯」、古くからの会員の方々は、ご存じのことと思うが、改めて紹介しておこう。「風伯」第34号によると、美術博物館の中庭に設置されている二つの彫刻作品の内の一つの作品名、白御影石の作品で、作者は小池郁夫（1935生）一陽会会員。一般的には風神を意味するようだが、この作品は、風に立ち向かう毅然とした人間の姿勢を表現している、という。改めてそう言われてしまうと、何だか心が奮い立ってくる。立派な名前にあやかるように、この「風伯」をもっともっと盛り立てて行き、よりよいものにして行かなくては・・・・。

さいわい、編集長を始めとして、編集部員も悩みながらも懸命に取り組んでいますので、皆様のご意見、ご協力を是非お願いいたします。　河邉満江（201）

【表紙作品】平川敏夫《樹焔》1964年　豊橋市美術博物館蔵

豊橋市美術博物館 友の会だより「風伯」第97号

編集・発行　豊橋市美術博物館友の会
会　　長　宮田正人
編 集 長　高須博久（副会長）
編集委員　鈴木冷子　神野志保子　河邉満江　冨田真知子　藤本逸子　清水貴裕
協　　力　豊橋市美術博物館
〒440-0801 豊橋市今橋町3-1　TEL.0532-51-2882
平成29年3月1日発行